

一念発起

「先生、社会19点でした！」

公立高校入試当日、塾に寄って自己採点をしたS君の声だった。「え？19点？」今までの彼の点数からすると、にわかには信じられないほどの高得点だ。S君自身も驚きと喜びと安堵感の混ざった、少し興奮した面持ちでいる。まだ自己採点中の子などもいたので、一緒に声を出して喜んであげることではできなかったが、これまでの彼の努力を思うと私も心からうれしかった。

入塾したのは小6。明るく屈託のない男の子だった。教わったとおりのやり方でやる素直さがあったので、算数はぐんぐん伸びた。ただ、中学に上がって9教科となり、かなり苦戦を強いられることとなった。興味のないことを覚えるのが苦手だったのである。覚える教科の代表といえば社会。大大大嫌いだった。これがどうにも頭に入らない。

英語はパートテストに真面目に取り組み、丸暗記ではなく文法もきちんと理解しようとしたので中2の途中から飛躍的に伸びてきた。どの教科もとにかく授業の説明を真剣に聞いているので思考力が伸びる。数学も理科も思考力の伸びに従って順調に伸びる。読解力を心配していた国語も中3の夏季特訓以降、深く読み込むようになり力を伸ばしてきた。残るは社会である。ワークをやって、その確認テストを受けても合格点がとれない。歴史の流れをポイントでまとめた年表を覚えるのもままならない。教科書を読んでもすっきり頭の中に整理されない。彼の志望校は、3年一学期の通知表が出た時点ではまだ何となく「ここに行けたらいいな。」というくらいの気持ちだったため、そこまで真剣にのめり込んで社会の勉強に取り組めなかったのだ。

彼が変わったのは夏休みの終わり頃、千種高校に見学に行き、バスケ部の練習を見てからだった。「この高校に来てバスケがやりたい！」彼は初めて心から願った。そこからである。苦手の社会にも本気で取り組み始めたのは、何とかしようと悩んだ末、いっそのこと教科書を丸暗記しようと考えついた。なんと彼は受験本番までに地理、歴史、公民、全ての教科書内容を丸々覚えきったのである。小さな字も含め、書かれているもの全て。5ヶ月かかった。内申は千種高校には一般的には足りないと思われるものだったが、とにかく合格したい一心で最後の最後まで努力を続けた結果、当日87点（社会19点）という立派な点数が取れたのである。

この年千種はかなりの人気で、残念ながら合格にはもう一步届かなかったが、この受験での努力は彼に「自分はやればできる、自分はやれる。」という自信を持たせた。今は次の目標に向かって春日井高校で日々頑張っている。クラス会長に選ばれ、元気に自転車で通う毎日である。